

●落語「粗忽長屋」より

「どうもすみませんです。ちっとも知らなかったんですけど。兄貴にきて気がついたんですけど、昨夜ここへ倒れちゃったそう。」

「おい、どうしようもねえな。こいつは。おなじような人がもう一人ふえちゃったよ。ばかばかしいいたらねえぜ。この人、行き倒れの当人だなんて。あ、あのね、おまえさんね、こっちへ来てね、よくごらんよ、目がさめるから。」(中略)

「なんだか顔が長えようだぜ。」

「一晩露に当たって南風が吹いたんだ。顔だつてのびらあ。」

「はあ、そんなもんかな…あ、あ、あ、おれだ。やいこのおれめ、なんてまああさましい姿になっちゃまって、こんなこと知ってりやア、もったんか食つとけばよかった。どうしよう。」

「どうしようだなんて、泣きつらするねえ、みっともねえ。頭のほうを出せ、足のほうは手伝うから。」

「そうか、じゃアたのむぜ。人間、どこでこんなことなるかわからねえな。こんなことで恥をさらすなんて。」

「おいおい、だめだ、だめだよ、さわっちゃこまるんだよ。抱いてみて、わからねえってのもいけねえな。よくごらんよ、おまえじゃないんだから。」

「うるせえ。よけいなこというねえ。当人が、自分で見ておれだつていてるんだ、これほどたしかかなことはねえじゃねえか。いいから抱け、抱けよ。」

「なにも自分の身体を抱いて…:…なんだか、わけがわからなくなっちゃったな。兄貴、抱かれてるのはたしかにおれだが、抱いてるおれはいったい誰だろう。」

新しいといひ得るものが世の中にあるであろうか。むしろ平素自明のもの、既知のもののように考えていたものに驚異を感じ、新たに見直すところにある。
〔人生論ノート〕三木清 新潮文庫

●落語・演劇のすすめ

また、視点を変えるところで、落語における語りは示唆に富んでいます。一人の人物があるときには長屋の住人になり、あるときには侍に、そして、あるときには番頭になるという変幻自在さが語りの世界の奥行きを広げ、一種の複数の世界観があらわれています。

例えば、有名な「粗忽長屋」では、幾重にも巡らされた重層的な視点の動きにより、人物像が的確に、そしてユーモラスに表現されています。(上段参考)

演劇を鑑賞することや、実際に自分が劇の登場人物になりきってその役割をこなすことも、心情を深め、多様な見方をする契機になります。また授業の中で、ロールプレイング(役割実演法)を取り入れることによって豊かな表現を学ばせることもできます。

書いてみよう

●旅に出た時の経験で、見方や考え方が変わった経験を書いてみよう。

●昨日の自分の行動を、次の条件で表現してみよう。

【三人称で】

【二人称で】

※修学旅行での体験。

(東京に行き、人が話をするときに相互の距離や混雑の度合いが重要な意味を持つことを知った。)

(京都の言葉と東北の言葉との違いについて、改めて考えさせられた。)